



東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合 <http://www.tokyo-workers.jp>

2023. 3
March
No.91



私の仕事術

社会問題と向き合う原点

高校生の時に起きた湾岸戦争のリアルな映像に衝撃を受けました。現地の人を思い心痛めると同時に、「なぜ紛争が起きるのか? 止められないのか!」を考えるようになりました。その際、テレビ映像を通じて目にした現地に出向いて救援している人たちの姿が印象に残りました。

一方で、当時愛知県の田舎に住んでいたのですが、新しい道路を通すために田んぼとお墓がつぶされる様を目の当たりにしました。亡くなった方が眠る大事な場所だと思っていたお墓が、道一本のために移転させられる。衝撃でした。この戦争とお墓の一件で、地域に暮らす人の思いとは違うところで動く社会のあり様や思惑が人びとの大切なものを奪っていくのではないかと思い至りました。そこに当事者の声はないのです。そんな状況に「NOと言えないのか?」が原点です。

働くことの選択肢は多様

そんな思いを持ちつつも、社会問題に仕事として向き合うまでには様々な出会いがありました。就職氷河期世代でリクルートについて行けず、「私は何がしたいのか?」を考えた時に先の思いが頭をもたげました。今のようにインターネットで「環境 ボランティア 活動…」などと検索できる時代ではありませんでしたが、たまたま出会った東欧での酸性雨の影響を受けた森林再生プロジェクトに参加しました。そこで世界各地から来た同世代の人の多様な生き方を見て、日本での就職に対する画一的な価値感から解き放たれました! そして、NGOの存在を知りました。イギリスの海洋生物保護団体で1年半ほど仕事をしたのち、社会の課題にどう

子孫から借りている地球を
受け渡していくために

日本国際ボランティアセンター 渡辺直子



●わたなべ なおこ●

日本国際ボランティアセンター(JVC)スタッフ。愛知県出身。モザンビークにおける日本のODAによる「プロサバンナ事業」に反対する現地小規模農民たちとともに日本政府に対するアドボカシー活動も行う。ともに活動する仲間と立ち上げた「モザンビーク開発を考える市民の会」のメンバーである。



プロサバンナに反対の声をあげていた農民組織の女性たちと一緒に

向き合うかを学びたいと、帰国して大学院に進みました。

声を上げることをやめない

現場の人と共に活動をしようと、日本国際ボランティアセンターに入職しました。担当した南アフリカはHIV陽性者が世界で一番多い国で、日本のようないくつかの医療や潤沢な医薬品はない一方、HIV陽性者を地域で支える仕組みがあります。様々な活動を通じて現地の人からのたくさんの学びがあり、それが日本のODAによる「プロサバンナ事業」に反対するモザンビークの小規模農民たちとの活動につながりました。「貧しいアフリカで大規模農業開発を行い、経済成長を」という同事業に対し、農民たちは事業が環境破壊を起こすと警鐘を鳴らし、「私たちは地球の守護者だ。環境保全型農業にこそ発展の可能性がある」と誇り高く言います。事業は利益をもたらすとの日本政府の説明に「ほしいのは主権であり、尊厳だ」と訴える農民リーダーは本当にカッコよかったです! 地球に暮らす人間の位置を見据えた世界観を持ち、アフリカや小規模農民が支援対象として描かれ続けることに対し、価値観の転換を求めていました。プロサバンナ事業は2020年7月に中止(日本政府は「完了」と発表)されましたですが、何の総括もされていません。モザンビーク北部では日本の官民も参画する資源開発をめぐり紛争も起きています。「紛争を止めたい」と、今まで強く思う日々です。

infomation

「モザンビーク開発を考える市民の会」



土地収奪の状況等をモザンビークの農民から聞き取り調査



社会をつくり直す！

実践報告

File
No.46

合同会社 野の～量り売りとまちの台所～(東京都三鷹市)

共に働く(協同労働)事業をまちにひろげよう

東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合では「生活クラブの学校/起業講座」を行っています。この講座は共に働く(協同労働)事業立ち上げの通過点です。講座に参加した岡田光さんは地元の仲間と共に、「合同会社 野の」を立ち上げ、2022年10月に起業イメージであった「量り売り、を実現する店舗「量り売りとまちの台所 野の」を東京都三鷹市にオープンしました。



気候危機に立ち向かうために何かできないか

岡田光さんは大学4年時に「量り売りの店をやりたい」という明確な目標を持って、起業講座に参加しました。気候危機に立ち向かうために何かできないかとの思いが、「量り売り」という発想に繋がったとのことでした。かつてプラスチックの使い捨ての容器や、持ち歩き用のビニール袋なしで買い物をしていたあの時代。実はフードロスやゴミ問題に取り組むきっかけに繋がるSDGsの根本的な考え方を通じる買い物の方法だったのだ。

「ビジネス初心者の市民が集まり、三鷹での“食材の量り売りのお店構想”がはじまったのが、2021年2月(Facebookから)」。

野ののメンバーは20代～60代の8人で、元々地元でのさまざまな地域活動を行っていた人が中心となって発足しました。1年8ヶ月の準備期間中に学習や見学等を行い、働き方として、協同労働のワーカーズコープやワーカーズ・コレクティブについても学びながら、合同会社設立に行き着きました。三鷹駅から徒歩7～8分の商業エリアに店舗物件が決まってからは、改修費などメンバーで出資し、事業の形も決め一気にスタートし、開店に

漕ぎつけました。

やりたいことを「野の」の運営に詰め込んで

町屋風の細長い店舗の入り口から2/3ほどの面積は、キッチン設備を設置したシェアキッチンとし、奥が量り売り店舗となっています。シェアキッチンでは木曜日が「野の」メンバー担当で「野のごはん」がメニューになっています。また月曜日は味噌づくりなどイベント企画の曜日で、他の曜日のキッチン利用はシェアメイトとして賃料をいただく仕組みになっています。互いの顧客が量り売りもレストランも利用するなど相乗効果があるという事でした。年末年始やお盆休みを除き無休の運営で、当初の事業目的である「地域との繋がりや自然を大切に、ていねいな暮らしを発信し続けます」を事業に盛り込んでいます。

量り売りは基本の調味料や穀類、地元の野菜、卵、ソース、ケチャップ、乾物、油、三鷹産クラフトビール、日本各地のお酒、ワインなどが置かれ、常連の



左:岡田光さん、右:井川恵太さん



方は入れ物持参で買いに来ています。メンバーが仕入れ担当となり、それぞれが開拓しているとの事。足りない分野は先輩の量り売り店から教えてもらうなどのネットワークもあるそうです。必要なモノを必要な分量だけ買う。使った包材をゴミとして処分しなくても良いなど、丁寧な暮らし方につながります。

暮らしと仕事は半農半Xで

働き方をシェアし、店長を務める井川恵太さんが、週5日勤務でお店に立ち、他のメンバーもダブルワークで店番をしています。井川さんは自転車で3分ほどの自宅から通っています。取材の日も、お連れ合いが生まれて間もない赤ちゃんを連れてお店に顔を出されていました。

1990年代に提唱され、コロナ禍で注目された「半農半X(エックス)」という自分の食べる分は自分で作る農業を営みながら、自分のやりたいこと、やりがいのある仕事に携わる暮らし方。メンバーの岡田光さんは卒業後「野の」で働きながら、山梨県北杜市にある畑で「畠から食卓へ」を体験できる場づくりを進めています。稼ぎと暮らしを同時に使う、そんなライフスタイルをやり続けてほしいと思います。「野の」の事業が、参加したメンバーのそれぞれの思いを詰め込んでスタートしました。ワーカーズ・コレクティブも共に働く事業所の仲間として応援したいと思います。

細谷正子(東京ワーカーズ・コレクティブ副理事長)
和田安希代(東京ワーカーズ・コレクティブ理事長)

「生活クラブの学校ーはたらくの講座ー」

共に働く事業=ワーカーズ・コレクティブのタネをみつけ続ける!

東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合は生活クラブ生活協同組合東京が行っている「生活クラブの学校」で、「はたらくの講座」を開き、ワーカーズ・コレクティブの働き方を発信してきました。講座は、基礎編(全3回)で「ワーカーズ・コレクティブとは」「労働者協同組合とワーカーズ・コレクティブ」「生活クラブ生協が協同組合って知っていましたか?」を学びます。続いて、実際に事業プランを作成する「起業講座(全3回)」です。起業講座では、自分流の働き方、事業のイメージを描くために、参加者どうして意見交換を重ね、最終的に1枚の「事業計画シート」をまとめ、発表します。

2021年度と2022年度の2年間で延べ230人が参加しました。自己実現を大切にした働き方は2022年10月に施行した「労働者協同組合」と共に、新しい働き方として特に若い世代の注目を集めています。起業講座の事業計画で発表された計画の一部を紹介します。

起業講座でみつけたタネ

「やわらぎ」：目的／困りごとへのアプローチ。傾聴、制度への案内、制度窓口への対応のコツ。
 「地域のオープン基地 おでん」：目的／子ども、高齢者の孤食・孤独解消。コミュニティ食堂事業、子どもショートステイ事業、レンタルスペース事業
 「おたすけたい」：目的／都会の過疎地での高齢者の楽しみを提供。移動手段の提供。
 「日替わるお店」：目的／若者やファミリー世代が地域活性化のアイデアを共有し、発揮できる「拠り所」の提供。デザインを生かしたワークショップ、環境にいいものの販売、場所貸し、カフェ、テレワークのワーキングスペース、充電スペース、制服リサイクル。

まず、「自分はどうしたい!」を発信し、共鳴できる人が集まることから事業計画が具体化します。これからも地域で立ち上がる共に働く事業のタネをみつけ、育て、社会を作り変えていきます。

